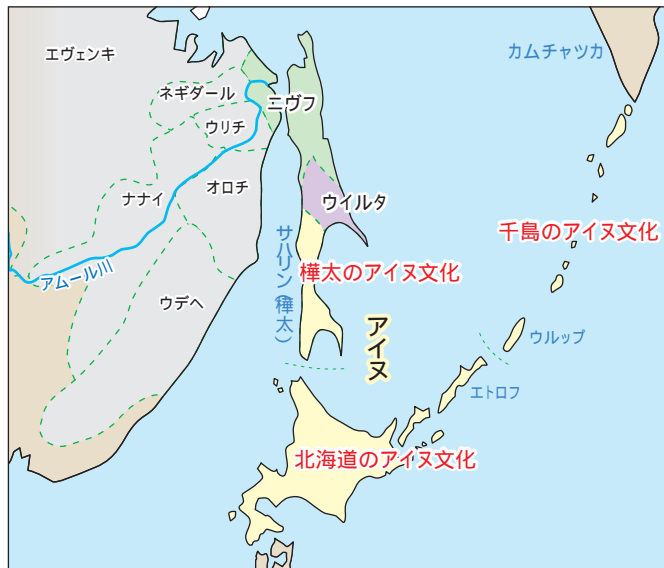
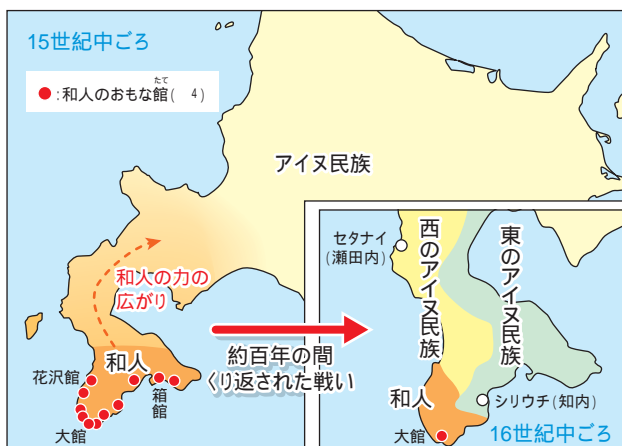


アイヌ文化の広がり



3つのアイヌ文化と北の民族文化。それぞれのアイヌ文化の中にも、さらに地方によるちがいがある。 (『アイヌの歴史と文化』より、改変)



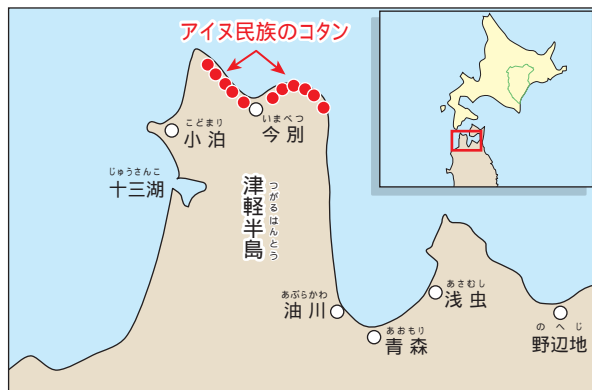
(左上)15世紀中ごろ、和人たち力がのぼしていた範囲。
(右下)16世紀中ごろ、和人(蠣崎氏)との話し合いで定められた、道南、渡島半島での境界。 (『アイヌの歴史と文化』より、改変)

青森県にも暮らす「アイヌ民族」

13世紀には、「大和の国」の支配が東北地方にまで広がっていましたが、アイヌ文化が本州から消えていたわけではありません。

17世紀、江戸時代に入っても、青森県の津軽半島や下北半島には、アイヌ文化的な暮らしを続けている人々が、コタン(集落)を何カ所も作っていました。

だんだんと弘前藩や盛岡藩の支配が強まり、また、和人の移住が進むなどして、伝統的な暮らしができなくなっていきますが、少なくとも江戸時代の終わりまでは、その伝統が残っていたようです。また、この地域の和人の文化にも影響をあたえたといえます。



●:江戸時代前期(17世紀ごろ)、津軽半島(青森県)でアイヌ民族が住んでいたところ。「今別」「野辺地」「十三(もともとトサ)」などはアイヌ語からきたという。 (『アイヌの歴史と文化』より、改変)

12～13世紀ころ、北海道ではアイヌ文化が花開きました。アイヌ文化と一口にいいますが、地方によって、ことばやししゅうの文様など、さまざまな点で異なります。

アイヌ文化は、サハリン(樺太)でも成立しています。また、ウルップ島より北の千島の島々にもアイヌ文化は広がりを見せています。

これらサハリンや千島のアイヌ文化は、北海道の文化との間にちがいが見られました。(クナシリ[国後島]とエトロフ[択捉島]は、北海道のアイヌ文化にふくまれる)

例えば、サハリンのアイヌ文化では、木の人形をお守りや祈りに使うなど、ニグフやウイルタといった、サハリンにいたほかの民族とのつながりがありました。また、千島のアイヌ文化は、海での狩猟を中心としたものだったと考えられています。

和人との戦い... コシャマインの戦い

12～13世紀ころになると、それまでは「エミシ」と呼ばれ、擦入(アイヌ)文化が強く残っていた東北地方北部までが、「大和(日本)」の支配下に入ります。

やがて、北海道南部の渡島半島では、津軽の豪族・安藤氏の家臣や本州からの移住者(和人)が暮らすようになり、「館(砦)」を持つものも出て、支配地を広げていきました。

1457年、コシャマイン率いるアイヌ軍が、和人たちと戦います。コシャマインは、ほとんどの「館」を破りますが、花沢館の武田信広に殺され、アイヌ軍は敗れます。

その後の約百年間、何度も戦いが起きます。その結果、和人の支配地(和人地)は渡島半島西南部に限られます。

3 安藤氏(あんどうし):津軽(つがる)地方を支配した武家・豪族(ごうぞく:地方で勢力や支配力を持つ一族)で、羽田国秋田郡(でわのくににあきたくん)までを支配した。室町時代中期以降は「安東氏」とされる例が多い。(p111)

4 館(たて):和人の砦(とりで)であり、その地域で支配や交易管理の拠点ともなった。
5 武田信広(たけだのぶひろ):コシャマイン軍に勝ったのち「花沢館」の蠣崎(かきざき)氏の養子となる。蠣崎一族はしだいに和人を従えていき、子孫が松前氏となる。